

工藤慎太郎 編著

運動機能障害の「なぜ？」がわかる評価戦略

林 典雄（運動器機能解剖学研究所）

このたび、森ノ宮医療大の工藤慎太郎先生の編著による、『運動機能障害の「なぜ？」がわかる評価戦略』が上梓されました。まずは、書籍の編集ならびに執筆にかかわられた先生方の情熱と労力に敬意を表します。

工藤先生ならびに執筆者の一人である森田竜治先生（おおすみ整形外科）は、私が岐阜市にある平成医療専門学院（現・平成医療短期大学）で教員をしていたころの教え子です。学生時代の工藤先生と森田先生は、たぶん（笑）……優秀な学生だったと思うのですが、詳しい成績までは覚えていません。当時の教え子たちの顔を思い浮かべますと、よい意味での野心家で、現状に満足しない向上心と強い探求心を持った、原石のような学生が毎年いたような気がします。このような原石が臨床に出て、自己研さんし、さまざまな努力を積み上げて磨かれることで、自ら光を放つ「真のリーダー」になると信じています。そのリーダーとしての証が、書籍の執筆という作業です。工藤先生は、これらのプロセスを、先頭に立って実践している若き理学療法士であり、今後ますます活躍が期待される理学療法士の一人といっても過言ではないと思います。

本書のキーワードは、「動き」「解剖学」「運動学」です。この中で「解剖学」と「運動学」は、運動器理学療法を実践する上で必須の学問であり、解剖学と運動学の文章化を試みた本書は、ある意味「王道の書籍」といえます。

加えて、本書の重きが、「評価」に置かれているところも注目に値します。往々にして、「どう治す

か？」が臨床の中で重要だと錯覚されがちですが、「どう治すか？」の前に、「何を治すか？」を明確にする必要があります。これこそが運動器障害の評価であり、治療の適応を決めるプロセスです。

Step1（動き）では「どう動かすと痛むのか」、step2（解剖学）では「どこが痛むのか」、step3（運動学）では「なぜ痛むのか」の一貫した3部構成で本書は構成されています。これも読者に配慮した粋な計らいであり、テンポよく読み進める助けとなっています。このようなエッセンスも、本書から読み取っていただきたいと思います。

あまり褒めてばかりいると工藤先生たちのお尻がかゆくなるので、少しだけ私の意見を……。パッと読んで、初学者にはちょっと難しいかなと感じました。本書の読者対象は、臨床家に置かれているように思います。臨床を経験していない学生は、もっと先に学ぶべき基本事項を押さえたうえで、本書を手にとるとよいでしょう。少し臨床を経験し、何かしらの壁にぶち当たった臨床家こそ、本書を手に取り、じっくりと自分の評価内容と対比してみてもどうでしょうか。そして、本書に記されていることにとらわれず、さらに多くの文献に触れ、自分なりに咀嚼し、最良の治療効果を患者に与えることが大切です。それこそが理学療法の醍醐味です。

本書を手にした多くの理学療法士が、患者の笑顔を見るために、努力を続けていただきたいと思います。

（B5判 頁360 2017年 定価5,200円＋税[ISBN978-4-260-03046-5] 医学書院刊）